

特別支援教室実践報告

横浜市立市ヶ尾中学校 「学習ルーム」の取り組み

平成 26 年 10 月

もくじ

はじめに

1 学習ルーム（特別支援教室）のニーズのある生徒像

- （1）自閉症スペクトラム観と支援のスタンス
- （2）思春期の特徴
- （3）生活しやすくするための技術指導

2 学習ルーム（特別支援教室）利用の手続き

3 学習ルーム（特別支援教室）運営のための校内体制作り

4 生徒の抱える問題の把握と「個別指導計画」の作成

- （1）問題の把握のために必要なこと
- （2）個別の指導計画

5 教育課程

6 教材

7 人の確保

8 評価について

9 進路の展望

おわりに（まとめ）

資料 ●学習ルーム利用状況

●ケース報告

参考資料一覧

はじめに

特殊教育から個別支援教育へ移行してから13年が経ちました。子どもたちをめぐる環境は徐々に変わり、どれくらいの子どもたちがその恩恵を被ってくることができたかは計り知れません。

けれどもその一方で個別支援教育の対象でありながら、いまだに支援を受けることができずに孤独に戦っているゾーンの子どもたちがいることも事実です。個別支援学級の枠におさまらず、普通学級では支援が十分ではない生徒たち。そんな彼らの居場所となり、成長を促す場所となるべく取り組みが始まった「特別支援教室」を「学習ルーム」としてスタートした市ヶ尾中学校でのこの半年をふりかえり、さらには今後の半年の展望をまとめその意義と成果を検証します。

今年度の市ヶ尾中学校「学習ルーム」の取り組みの多くは、横浜市教育委員会の「自閉症教育の手引きⅡ」と児童精神科医である吉田友子先生の著書である「自閉症・アスペルガー症候群『自分のこと』のおしえ方」を参考に実践しています。学校現場にいる自閉症スペクトラムの生徒達、自分らしく生きていくということと現実との間にギャップがあり、自己肯定感の低い生徒達に「自分らしくあるとはどういうことか」という課題に立ち向かうために、自己理解を促し、彼らの孤独な戦いを支援していく上で医学的なアプローチと教育的なフォロー双方が必要だと日々実感しています。

保護者・学校・医療的専門機関が一体となって「あなたには私たちがついている」という吉田友子先生の著書の「はじめに」の言葉を一人でも多くの生徒に伝えたい。この吉田先生のシンプルながらストレートな言葉が、この学級を運営し、さらに1校でも多くの学校でこの学級を広めていきたいと決意させた直接のきっかけです。

今こそが私たちが決意を新たにする時だと思うのです。「私たちはあなたたちとともに歩んでいく用意があること」を生徒たちに伝えたい。日々の生活の中で自分の力のなさに落ち込む毎日ですが、それでも一歩でも前に進みたい。その思いでこの1年を過ごしています。

誰もがこのメッセージを伝えることができるシステムを作り、一校でも多く特別支援教室が設置され、一人でも多くの生徒に前向きに人生と向き合う力を育てることを支援していくために、まだまだ道半ばではありますが、今年度の市ヶ尾中学校の取り組みをお伝えする中に少しでもヒントがあればと思います。

横浜州市市ヶ尾中学校 学習ルーム担当 土屋 由紀子

1 学習ルーム（特別支援教室）のニーズのある生徒像

（1）自閉症スペクトラム観と支援のスタンス

学習ルーム（特別支援教室）を利用するニーズのある生徒として割合が高いと予想されるのはやはり自閉症スペクトラムの生徒たちです。特に知的には遅れが目立たず、普通級で生活をしてきた生徒たちです。



自閉症スペクトラム・・・「障害」という言葉の違和感

- 脳の機能のタイプであり、能力の欠落があるわけではないということ。
- 「苦手」なこともあるが、「強み」になる能力も兼ね備えていること。
- 医療に関わることがあっても「治療」ではなく「自分の特徴を生かし、苦手を克服する工夫を手に入れる」ことが目的だということ。

以上のような理由から「障害」という言葉は実際には違和感を伴うことが多く、障害ではなく、「特性」であることを私たちが強く認識することが、本人や保護者の抱えている思いに近く、納得感を得やすいように感じます。

多数派である定型発達の子どもたちと少数派である自閉症スペクトラムの子どもたちとの違いは次の3つの特徴に集約されています。

自閉症スペクトラムの子どもたちは

①社会性の質の違い・・・社会的な振る舞いに独特な特徴があり、周りの生徒の共感を得にくい。普通人との関わりの中で自然に身についていく一般的な振る舞いを自然に身につけることが苦手。自分なりの常識にこだわりがあることも多く、修正が難しいこともある。

②社会的コミュニケーションの質の違い・・・知的な障害がない、あるいは軽い生徒は言葉は理解しているように見えるが、実際には正しい意味で使っていないことも多く、多く

の生徒が自分が難しい単語を使って話す割には、相手の話し言葉を聞き取り、理解することは苦手。

③社会的なイマジネーションの質の違い・・・一度ルールとして定着した決まりは守り通そうとする傾向が強い。周囲とうまくいっていないために教室には行けない状況でありながらも、教室に行くべきと思い、学習ルームを使うことに抵抗があったりする。ルールを守れていない自分を否定的に感じてしまう生徒も多い。

このような傾向を持つ生徒に、自分を正しく理解し、さらには自分を肯定的に感じてもらうためにも、私たちが自閉症スペクトラムについての認識を新たにし、支援のスタンスを確立する必要があります。

吉田医師の言葉を借りれば、

私たちの支援の目的

⇒「(自閉症スペクトラムの子どもたちが) 自分の認知スタイルに気づき、自分の認知スタイルにあった選択を胸を張って行い、自分の認知スタイルを長所として生涯活用していけるように」していくこと。

⇒「自閉症スペクトラムの認知スタイルを尊重するということ」はまわりがすべてを受け入れる、自閉症スペクトラムの生徒は努力しなくてもよいということではない。

自分も周囲も心穏やかに心豊かに暮らせるよう、多数派の考え方や感じ方を知り、お互いに嫌な思いをせずに暮らせる技術を身に付けるよう、私たちは技術指導を行う必要がある。

この自閉症スペクトラム観と支援のスタンスは常に忘れずに支援に当てる必要があります。

医療的な支援を同時並行して受けていくことは現実的には難しいのが現状です。以前に比べればはるかにクリニックの数は増え、アセスメントや診断を受ける生徒は増えていますが、必要ではないかと感じる生徒や保護者に生徒の特性の「可能性」伝え、医療機関につなげても6ヵ月待ちという状況も頻繁にあります。

医師ではない私たちが、先走って診断名を伝えることはできません。その傾向があることを認識して支援をしつつ、医療機関との連携をはかって行きたい旨を保護者を通して納得してもらうことが大切です。

その必要性を認識してもらうためにはスクールカウンセラーとの連携も有効です。状況

が緊急か否か、こういったクリニックが適切かなど専門的な部分はカウンセラーとの分業が理想的です。

現在市ヶ尾中学校では医療的なアプローチの必要な生徒に関しては新横浜にあるリハビリテーションセンターの受診をおすすめしています。

理由としては以下の4点です。

- ①相談・方針の決定に医師が関わっていること（診断・必要に応じて投薬も可能）。
- ②正確なアセスメントとアセスメントに関しての評価・今後に活かすための解説がある。
- ③学校（就労してからは就労先）との連携をとってくれる。
- ④高校までに初診を受ければ成人後も相談の継続が可能である。（H26 年現在）

大変重要なことは本人と保護者が前向きにアセスメントや診断を受ける状況になるまであせらずに進めていくことです。学校の最低限果たすべき役割は医療機関や相談機関のお知らせであり、利用するかどうかを選択するのはあくまでも保護者・本人の意向です。

けれども、中学校生活に慣れ、時間とともに少しずつおちつきを見せ始める生徒たちも高校・大学・就職といった次のステージで環境が変わるたびに問題が発生するかもしれません。その時の相談先の確保は中学生時代までにやっておくべきことのひとつであると考えています。

（2）思春期の特徴

小学校時代には特に人間関係など問題がないと保護者は思っていたのに、中学校に入ると突然難しい問題に直面したと感じている保護者が多いようです。集団の中では問題を抱えており、小学校からは入学時に生徒情報として中学校には伝えられていたり、中学校生活を通じて学校としては生徒の自閉症スペクトラムの特性によるものと予想したりしますが、中学校の対応が問題であると思われて、なかなか保護者に私たちの思いが伝わらないことも多々あります。

なるべく本人の辛い思いをする時間を短くし、支援につなげていくために思春期の特徴について考えておきたいと思います。

小学生の頃

- 一方的ながら友達と積極的に関わる
- 活発な印象の生徒も多い
- まわりも自分と違った子どもも受け入れることができる



※思春期（小学校高学年～中学生）に入ると・・・

- 友達と同じように行動できていない自分に気づく
- 先生の話聞いても理解できずに勉強が苦手に（将来への不安）
- 自分の考えや正しさを激しく主張する（人の考えに興味をもてない）
- 友達グループに入れない

※思春期の時期の定義については諸説有り



自己肯定感が下がる
自信がなくなる・消極的になる



人とのコミュニケーションに不安を覚え
不登校・昼夜逆転など人とのコミュニケーションを避けるようになる

また、教室にいるほかの生徒たちも思春期を迎え、小学生の頃とは違った様子になっていきます。学校としては、この頃の子どもたちの意識についても充分理解しておき、保護者にも説明できると効果的です。

この年代の子どもたちの様子の説明として精神科医の佐々木正美先生の「思春期のアスペルガー症候群」の中に思春期の「ギャング・グループ」としてまとめられていますので、引用します。

思春期の「ギャング・グループ」

思春期の子どもたちがアスペルガー症候群（自閉症スペクトラム）の子を仲間はずれにすることには、その年代の子が排他的な感情を抱きやすいということが、関係しています。

いじめは卑劣な行為です。決して認めてはいけません。しかし、思春期にいじめの問題が多いのは事実です。その、排他的な感情の背景を知っておいてください。

子どもたちは10歳ごろに、ギャング・グループと呼ばれる集団を形成します。親離れへの独立心と、他者への依存心をあわせ持つ仲間同士のグループです。

ギャング・グループは共通性を重視します。同じ趣味をもつことで一体感を強めるのです。そしてアスペルガー症候群（自閉症スペクトラム）のこの規則への従順さや自分勝手に見える態度を敵対視しがちです。

家族や教師がこの構造を知っておき、いじめる側の子の意識をよく理解することが大切です。

ギャング・グループ
仲間同士で強く結束した集団
同調しないものを排斥する
アスペルガー症候群の特性は
排斥の対象となりやすい

★友達同士で同じ服装・同じ言葉をする
★グループにいる間は仲がよかったのに
外れると攻撃の対象に
★仲間内での対立がきっかけでグループ
が分裂 同調する者だけで結束する

10代前半に特徴的に現れ、その後はゆるやかな結束になっていく。

このような特性があることを認識しておくだけでも周囲の子どもたちへの見方が変わったりします。本人だけでなく、保護者にも理解を促し、お互いに成長していく時期であることを確認していきたいと思います。

(3) 生活しやすくするための技術指導

中学生時代は特性のある生徒にとっては生きづらい時代ではありますが、自分について知ることであまりうまく切り抜ける技術を身につけることができること、そうすれば自分の強みを才能として活かしていけることを強く伝えたいと思います。

ここにあげた強みと苦手のサンプル文は実際に市ヶ尾中学校で今年学習ルームを利用している生徒をひとり想定しながら抜き出してみたものです。

これらの長所と苦手を整理して伝えることで、私たちも彼の得意とするところを改めて認識することができ、それらを個別支援計画に取り込むことができました。ケース報告で詳しく載せていきたいと思います。

①自身についての正しい理解をサポートする

→そのためにポイントとして注意していること

- ・医師の診断がない限りは自閉症スペクトラムの名前は使わない（ことが多い）。
- ・先に説明したことのほうが記憶に残りやすいので必ず長所から伝える。
- ・苦手なことや、うまくできないことを取り上げるときには、その課題に今後どう向き合っていくのかをセットにして伝える。
- ・自閉症スペクトラムの特徴が全て当てはまる子どもはいない。その子の特徴にあったその子の納得のしやすい特徴を、具体例とともにあげる。

<長所のサンプル文>

- 見て気づくのが得意
- 好きなことにはとても集中できる
- 知的な好奇心が強い
- 記憶力がいい
- 自分の決めたことはやり抜く強さがある
- 理屈をおしえてもらえば納得できる
- グループ学習より一人（少人数）の方が勉強がよくわかる・集中できる
- 熟語や専門用語をよく知っている。
- まじめ
- やさしい
- ・・・など

<苦手のサンプル文>

- 好きなことを途中でやめることが苦手
- 途中でやめさせられるとイライラする
- たくさんの人と一緒になにかするのは疲れてしまう
- 忘れ物や無くしものが多い
- 運動や字を書く事が苦手
- うるさい音が苦手
- ・・・など

吉田友子著『自分のこと』のおしえ方」より

②正しいアセスメントや診断を受ける

このことは正しい自己理解に直結します。私たちの想像とアセスメントの結果とは一致しないこともあります。

アセスメントをしても数字だけしか出してくれない機関もありますが、できればレポート形式で、本人、保護者へのフィードバックをしてもらえるか、実施する前に確認が必要です。

本人の今後の生活に活かすことのできないアセスメントは何の意味もありません。

③サポーターの確認

まわりにいる理解者（サポーター）を確認し、自分のよさを発揮するための工夫を一緒に考え、行動してくれる人が誰なのかも一緒に確認することが大切です。

また教員はサポーターであることを伝え、特性を持った生徒たちは、毎日の生活の中で

常識やルールにとらわれ、苦しい思いをしていることが多いので、違った考え方があることを理論的に伝えていくことが大切です。すぐに結果はできませんが、少しでも考え方、見方を広げていく努力は必要です。

例) 友達はたくさんいたほうが良い⇒個性にあった友人と付き合うことで気持ちは安定するが、無理をして相手に合わせようとしても安定することはできない。 など

④不適切な行動を予防する

人間関係からイライラした気持ちが生じやすいので、あらかじめイライラを感じた時にはどのように対応したらよいか行動パターンを決めておくことで感情をコントロールしやすくなります。

学習ルームを利用している生徒の中で、教室で学習している際に友人とのトラブルなどでイライラした時には学習ルームに行くという約束をしていましたが、「いらいらした」という感情が具体的にどのようなことなのか本人がわからず、感情を爆発させてしまうということがありました。「イライラ」「落ち着かない」など抽象的な表現は実際にその感情を感じている場面で具体的に確認しておくことが大切です。

(4) 自閉症スペクトラム以外の原因が考えられる場合

自閉症スペクトラムが原因と考えられる時とそうでない場合との対応の差はそれほどありません。つまり、自閉症スペクトラムではない生徒に自閉症スペクトラムの生徒に対応するように対応しても害を与えるようなことにはならないということです。

2次障害を併発している場合も考えられますので、医療的なアプローチは欠かせないと思います。

2 学習ルーム（特別支援教室）利用の手続き

今年度の市ヶ尾中での学習ルーム利用に至るまでの流れです。

(学校便りに学習ルームについてのお知らせ・入学式等でのおしらせ 各学年集会での生徒への説明)



(保護者・生徒本人からの利用の希望)



担任・教科担当からの要望

日常生活の観察から、学年会等で支援の必要だと思われる生徒の名前をあげる



要支援生徒・保護者との面談

学習ルームの活用内容について伝え、要望を聞き取り、支援の可能性について伝える。

＜学習ルーム（特別支援教室）主な活用内容＞

- ①連続した学びの場としての活用（教室に入れない生徒の活動の場）
- ②スモールステップによる基礎の定着
- ③学年相応の学習のための丁寧な導入（復習・学習方法の提案など）
- ④クールダウンの場としての活用
- ⑤1対1または小集団によるコミュニケーション活動及び能力の育成
- ⑥本人の自己理解をすすめ、必要に応じて相談機関との連携をはかる
- ⑦家庭との連携をはかり、サポート力の向上を目指す

※横浜市教育委員会 「自閉症教育の手引き～認めよう、見つめよう、育もうⅡ～」より



学習支援担当者会議

今後の支援の方向について検討（アセスメント・支援方法についての決定・時間割作成）

学習以外の支援の必要な生徒については、コーディネーターとの相談

全職員から要支援生徒の情報（日常生活の中で気づいたこと）の収集



担任・該当学年学習支援担当・サポート担当会議

登校が可能な生徒に関しては日常生活の見守り担当としてサポート担当を決め、目標の確認や日頃の声かけなど気を配ってもらうようにしている。

目標の確認

目標を達成するための具体的な手立ての確認

日常生活の様子や目標の達成度合いについて検討

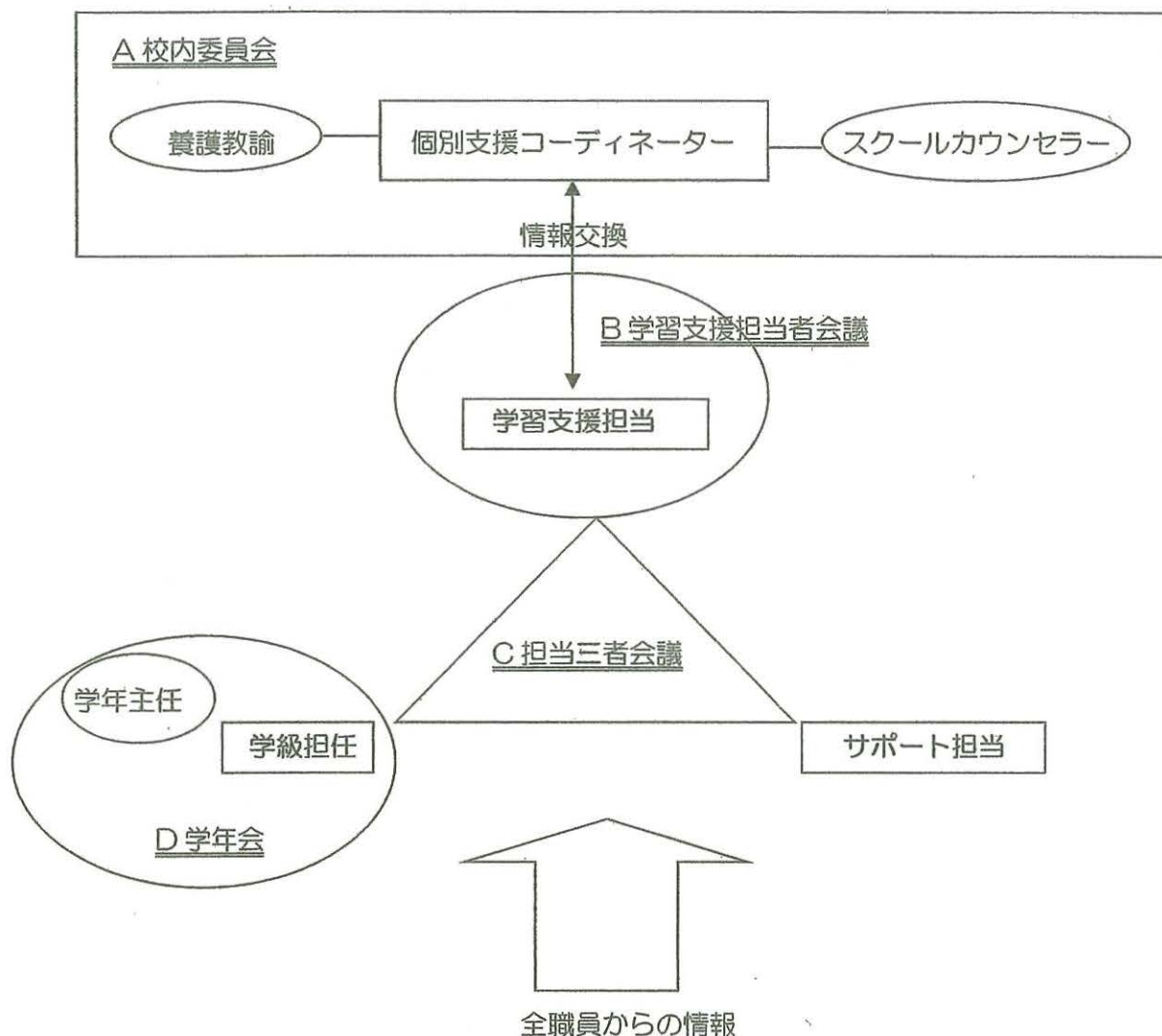
次のステップへ



生徒・保護者へのフィードバック

3 学習ルーム（特別支援教室）運営のための校内体制作り

①校内検討会議組織図



②各会議の役割

- A 校内委員会・・・学習支援のみならず、支援の必要な生徒についての支援方法の検討
- B 学習支援担当者会議・・・校内分掌の学習支援の担当者の会議 学年で要支援生徒の吸い上げを行い、保護者・生徒との面談を行ってアセスメント、支援方法の決定、時間割の作成などを行う。長期休業中の学習支援についても企画・運営。
- C 担当三者会議・・・担任・学習支援担当・サポート担当の三者で行う。日常の様子の情報交換・目標の確認および再設定・方針の確認など
- D 学年会・・・担任・学習支援担当より生徒の現状と今後の方針についての報告

各会議が開催される頻度については目安として月に 1 回程度としています。ただし、必要に応じて開催されることは言うまでもありません。また校内委員会はその都度、必要に応じて開催されるのはもちろんですが、必要な人を含めて拡大委員会も開かれています。その場合の必要な人の指定は個別支援コーディネーターの指示によります。

サポート担当者は立ち話程度でもかまわないので、個別に話す機会を設定していただいています。コミュニケーションが得意でない生徒が多いので、少しでも習っていない先生との関わりを増やし、職員室に来やすくすることも目的のひとつです。職員室に来れるようになると困った時には自分から相談できることも増えてきます。SOS が発信できることが全ての生徒の目標です。

4 生徒の抱える問題の把握と「個別の指導計画」の作成

(1) 問題の把握のために必要なこと

①保護者・本人との面談

保護者からの希望、もしくは担任や教科担当からの報告などにより、該当学年の学習支援担当に要支援生徒の名前があがってきた時には、まずは保護者との面談の日程を設定しています。聞き取りがしやすいように、本人は別日に設定していることがほとんどです。

聞き取りの内容は

- ・現在の登校状況
- ・困っていること
- ・生育歴・家庭での生活の様子
- ・希望する支援の内容 などです。

保護者との面談を終えて本人との面談を設定しています。本人が登校出来ている場合は日にちだけ設定していますが、登校できていない場合は手紙を作って保護者にお渡ししています。

文面は学習ルームの説明・学習ルームでできること・学習ルームの場所と中の様子を写真で載せています。写真を載せているのは視覚的に優位のある生徒が多いためであり、イメージを持ちやすくなると思ったからです。もう一点、面談の日時を指定して「来てください」と結んでいます。選ぶということが苦手な生徒も多いので、日時は 1 日のみ指定し、あえて選択肢はなしにしています。

<面談のお知らせの文例その1>ケース1 その1

不登校の生徒へのお知らせです。

こんなクラスがあるよ。ということと面談の日程・登校方法・など具体的に視覚的にお知らせしています。

●年●組 ●●●●● 様

平成26年4月9日

はじめまして。今年度市立尾中学校で学習ルームを担当する土屋由紀子と申します。
先日、お母さんや担任の先生とお話をして●●くんを学習ルームでの学習にお誘いしようと思い、このお手紙を書いています。

なんで学習ルームに誘われるんだろう?と思いますよね。
学習ルームについて少し説明したいと思います。

●人にはそれぞれのごとくにタイプがあります。
たとえば...

血液には血液型がありますよね。A型 B型 AB型 ●●くんは何型ですか?

それと同じように
考えたり、覚えたり、感じたり、筋肉に動けと命令をだしたりする脳
この脳にも実はいろいろなタイプ(型)があることが分かってきました。

たとえば右利きか左利きか。
これは脳のタイプのひとつです。

同じように大勢の中で学習の方が得意か、少ない人数で学習の方が得意か。
これも脳のタイプによって違ってくる事が分かってきました。
学習をするにも、生活をするにも居心地の良い環境で活動した方が効率が良いですよ。

いろいろな方のお話をお聞きて●●くんにとっては学習ルームでの学習がより、効率的であるのではないかと感じお誘いしています。

●どのような学習方法がよりか、どのような時間割がよりか●●くんに直接お会いして計画を立てたいと思っています。どうかわけ急ですが待っています!!

4月10日(木) 18:15~18:50 学習ルームにて

- ★登校の仕方について(時間・正門・東門どちらを使うか など)
 - ★国・数・英を中心に学習進度の確認
 - ★休み時間の過ごし方についての相談(休み時間は学習ルームで過ごすことができます。)
- 18:15は下校時刻を過ぎているので私服登校も可能です。

学習ルームは保健室の前

にあります。

去年と場所が違っているので
注意してください。



ちなみに
学習ルームの中はこんな感じです。



学習ルームを利用している人の時間割の例です。

(先生とマンツーマンの授業は意外と集中しすぎて疲れるので)まずは2時間くらいからはじめています。

時間	内容	やること
10:30	正門で土屋と待ち合わせ	学習ルームへ
10:40~10:50	今日の学習内容の確認	
10:50~11:40	数学	数学ペーパー
11:40~11:50	休み時間	好きなこと
11:50~12:30	国語・英語	教科書・ドリル
12:30~12:40	今日のふりかえり・下校	

帰りは東門(校務員さんの部屋の昇降口)から帰る人もいます。
もちろん正門からでもOKです。

<学習ルーム 教室レイアウト>

出入り口

